◆追悼◆

前副会長　佐々木誉実さんご逝去を偲ぶ

―山岳同人雑誌『山岳展望』から「山岳文化」への想い―

田中　文夫

二〇二一年一一月二六日、前副会長(二〇一一～二〇二〇)だった佐々木誉実さんは、享年八五歳でご逝去されました。

佐々木さんとの出会いは一九六八年、山岳同人雑誌『山岳展望』第二次編集同人の集まりですから、もう半世紀以上前となりました。

以来佐々木さんは、私より一〇歳年長の兄貴分的存在。佐々木さんと一緒に山を登ったのは、一九七一年七月、谷川岳一ノ倉沢烏帽子奥壁変形チムニーと、二〇一一年四月、中村純二先生ご夫妻、橋本祐吾さんらと一緒に高尾山を登った、たったの二度だけ。あとは「山を登らぬ山登り」。つまり「山を語り、山を考え、山を書き留める、山岳文化」をご一緒しました。

二〇〇三年三月、日本山岳文化学会創立にともない、佐々木さんから入会案内を受け、私は会員となりました。(NO．67)

日本山岳文化学会創立は、初代会長・齊藤一男さんの念願だったろうと拝察します。そして「山岳展望の会」はその初期段階として位置する、齊藤さんの希望的山「学」同人ネットワークと思われます。

一九六三年七月発行された『山岳展望　創刊準備号』には、次の錚々たる岳人が発起人として名を連ねています。

中村清太郎、深田久弥、平賀文男、海野治良、田中源助、上田哲農、堀内俊宏、風見武秀、杉本光作、横川文雄、山崎安治、近藤等、千坂正郎、安川茂雄、円山雅也、斉藤一男、青柳健、近藤信行、山川淳　　　　（順不同、斉藤は原書に倣う）

雑誌の位置づけとして、「商業誌ではなく、登山の正統的な研究を網羅する同人雑誌」、としています。

齊藤一男さんはこの考えを発展させ、同人雑誌では満たされず、岳人組織にまで発展させたのが、日本山岳文化学会ではないか、と推察されます。

一九六三年創立した『山岳展望』第一次編集は五年で息切れし、文頭の一九六八年に第二次編集同人が集められました。そこで私は佐々木さんに出会ったのです。中心となったのは、私よりも一歳年長の岩崎元郎さん。齊藤さんが経営していた印刷所「岩峰社」に、岩崎さんは居候となっていた縁からでしょうか？

岩崎元郎(昭和山岳会)、佐々木誉実(東電山ノ会)、佐内順(グループ・ド・ボエーム)、そして私(コンテニュアスクラブ)、遅れて・・・遠藤甲太、柏瀬裕之、大内尚樹、杉山美裕さんらが随時加わり、新宿駅ガード下の酎ハイ屋さんで編集会議。(私だけウーロン茶)

再出発した一九六八年一一月発行『山岳展望 第一二号』、佐々木さんは『山岳展望』の方向づけを次のように書かれました。

・・・登山が山という自然に対する人間のかなり浄化された行為の一つであるとすれば、そこにはひたむきで純な人間の姿が多くみられるはずである。こうした純な姿勢をもって営々として行われてきた山と人との関係を、さまざまな角度からさぐり、明らかにしてゆくことが、登るということとは別の価値としても必要なことである。そして、それをより多くの人々が共有することによって、登山という行為をさらに価値あるものとすることができるのではないかと考える・・・と。

しかし五年後の一九七三年九月、『山岳展望 第一七号』をもって廃刊となりました。

その最終号の主論文は、私が原稿用紙一二〇枚を書いた「日本山岳協会への批判」でした。

当時のオリンピック憲章には「アマチュア規定」があり、プロと称する者にはオリンピック出場資格がありませんでした。オリンピックと登山は何ら関係ないはずなのに、海外登山許可申請においては、国内有力団体の推薦状を求められます。外務省傘下でその国内有力団体とされたのが、社団法人日本山岳協会。ヒマラヤ登山等の許可申請において、日本山岳協会の海外登山推薦規定により、山岳プロガイドが登山隊隊長である場合は推薦状を発行しない・・・という、現在では考えられない判断が下されたのです。

一九七一年に発足した社団法人アルパインガイド協会会員をプロガイドと認め、「プロガイドであるから海外登山隊の隊長になることは認められない」となりました。この措置に対し、「憲法に違反する」、と正面から批判した論文です。さらに、生命を賭する山岳高所登山者は、アマチュアよりもプロフェッショナルであるべきだ、とも主張しました。

最初は、クライマーの神様的存在だった古川純一さ

ん(二〇二〇年ご逝去)に原稿依頼したのですが、断られました。その代りにと古川さんは、当時山岳界の論客だった原真さん(日本山岳会東海支部、二〇〇九年ご逝去)への依頼状を書いて下さり、その依頼状を添えて原真さんへお願いしました。しかし原さんからも、「日山協には関わりが多いので書けない」旨の返信をいただき、代わる原稿として「奥山章氏と私」を送って下さいました。

書き手がいない中で仕方なく、私が自ら書くことになります。勤務中の昼休み喫茶店で一ケ月にわたり、原稿用紙一二〇枚を書いたのが「社団法人日本山岳協会への批判」。その原稿を和文タイプしたのが、当時岩峰社に居候していた岩崎元郎さん。印刷と冊子製本したのが岩峰社でした。

この論文への反響は無く、唯一「読んでる人は、読んでるよ!」と言ってくださったのが朝霧山岳会・梶山幸佑さん(都立一商山岳部OB、故人)。また、原真さんからは所感のハガキをいただきました。(今も保存)

一九七三年九月『山岳展望　第一七号』発行以降、山岳論文の書き手が見当たらなくなります。時まさに「ヒマラヤ鉄の時代」。論ずるよりも・・・登るが易し。

生死を分かつヒマラヤ岩壁登攀において、ガストン・レビュファの『雪と岩』のような山岳ポエムを語ったり、モーリス・エルゾーグの『処女峰アンナプルナ』のような人間模様を文学へと昇華させたり、ハインリヒ・ハラーの『白いクモ』のように神と対峙してみたり、「登り、かつ、考える」複素性(身体性 + 精神性)を失い、初登頂、初登攀という「記録」の持つデジタリティなスポーツ性へと傾いていった時代でもありました。

時、まさに、時代を席巻していた第二次RCC代表・上田哲農さん(一九七〇年ご逝去)は『日本の岩場』序章にて、次を示された。

・・・私達は、現在、行為される岩登りの現実を熟慮した結果、―「近代登山はスポーツ的要素をふくむ」、という定説のもつ、あいまいな表現を拒否し、それが人と人との競技ではないにしても、さらに一歩、スポーツそれ自体の本質に近づきつつあるのが現状であり、また、これとは全く別の次元で登山という感覚から離れて、岩自体を楽しむ、スポーツそのものの岩登りが、別の人達によって誕生しつつある事実も知っている。

この二つの傾向の構成分子は、スポーツ以外のもの、古い装いであるところの情緒的要素を捨て去り、冷厳な岩そのものの上に、片方はアルピニズムをスポーツ的見地から解明しようとし、他は「新しき価値」として、その出発をスポーツから拡げたものである。RCCⅡは、前者に属する・・・と。

このRCCⅡの主張を批判して一九六七年、二一歳だった私は「小さな批判　RCCⅡへ」を書いた。

…果たして現代登山には、情緒的要素が不要なのだろうか？　冷厳な岩そのものの上にあるアルピニズムとは、果たしてどのようなものだろうか？　「スポーツ要素を含む」という定説のあいまいな表現を、果たして拒否する必要が現代登山にあるのだろうか？

しかし彼らこそ、最も情熱的な人間ではないか！「近代登山はスポーツ的要素含む」、それで良いではないか。「ならば、それ以外にどんな要素が含まれているのか。その間の関係は。それが僕らにとってどれほど必要なことなのか。どうして山は、僕らを呼び続けているのだろうか」、とアルピニズムの行為(実践)を通して思索し続けないのだろうか？　捨て去ることではなく、論証することこそ、現代登山家のなすべき道程ではなかろうか。そして山は、そんな僕らに関係なく、いつも、そこに、存在しているのだ。

僕は山に登り、哲学へと導かれた。美と芸術へ導かれた。宗教を考えさせられ、心理学も教えられた。そして今、生活の主要な一部となっている。

山登りは文明でなく、文化の所産なのだ。そして文化は文明に支えられている…

と、『若き日の山々』に書いた。

それから半世紀以上を過ごした今、山での生死を含めたたくさんの体験を経てもなお、この思いが変わらないのはなぜなのだろうか？

六八歳で生業を廃し、自由に思索できる時間を得た老いの中、それらを整理したくて今も著作に勤しんでいます。特に、登山と山岳スポーツとの違いを整理したのが『登山の生態分類(学)』(二〇一六年)、登山における全人格的行為を整理したのが『登山の総合人間学』(二〇一五年)、諸々の感性を整理したのが『山と美の終焉』(二〇一九年)。それらはいずれも私製版で作成し、国立国会図書館蔵書になっています。私製版とした意味は、①出版しても売れないから、②読まれることを考慮せず、書きながら自ら納得できれば良しとする、主観的な哲学書だから。したがって次なるテーマは、読者に読んで理解していただける、客観的・科学的な作品を目指すことです。しかし主観と客観を分離せず、両者を混ぜ合わせた構成(複素数的構造)こそが、より宇宙論的な自然存在ではないかと、「複素的世界観」表現を模索しています。

最終号となった『山岳展望　第一七号』発行の翌年、私も「一九七四年　横浜山岳協会ネパールヒマラヤP29南西壁登山隊」へ参加。前記のごとく、横浜隊は隊長・古川純一で申請したものの、古川さんはプロと見なされて却下。代わりに「総指揮ならば良い」となりましたが、実際は隊長。そして申請上の隊長とされたのが私。しかし実際は、四人の登攀リーダーの内の

一人と記録係。そしてネパール政府等への形式的な挨拶で、私は隊長役を演じました。公募隊員一八名の登山隊編成において、この便宜的組織の意味を読み違える隊員が生じ、登山隊としての指揮命令系統に混乱を生じたものでした。

それから三〇年後の二〇〇三年、日本山岳文化学会創立総会において、初対面だった齊藤一男会長からの第一声、「また、あのような論文を書いて下さい」と言われたことには驚きました。それまで全く面識は無かったのですが、私の名札を見て即座に三〇年前の日山協批判論文に思い至る齊藤会長の記憶力には、驚きました。朝霧山岳会・梶山さんが言っておられたように、確かに「読むべき人が、読んで下さっていた」実感を得た瞬間。齊藤会長はそれ以前、日本山岳協会会長を歴任されていたからかも知れません。

かつて齊藤会長は東京電力に在籍され、社員で構成する「東電山ノ会」設立に携わったそうです。佐々木さんも参加され、齊藤さんは大先輩という間柄。

さらに佐々木さんは「東電山ノ会」の枠を超え、意欲ある若手会員を飛躍させようと、私に会員二名を紹介されました。そして登ったのが奥只見・銀山湖西面にある荒沢岳のスラブ状岩壁。その一人、深沢勇二郎さん(一九七八年、ダウラギリ遭難死)とはその後、厳冬期の八ヶ岳・阿弥陀岳広河原沢一ルンゼ奥壁のオーバーハングを、フリーで登り切りました。

深沢さんにはヒマラヤ登山願望があり、一九七四年　横浜山岳協会P29南西壁登山隊への参加を予定しました。しかし急遽、東京電力を退社して故郷の群馬県大間々へ帰郷することになり、群馬県山岳連盟傘下の大間々山岳会へ移籍します。

深沢さんと再会したのは一九七八年夏、ネパールの首都カトマンズでした。彼は群馬県山岳連盟が派遣した「ダウラギリⅠ峰南東稜登山隊」の登攀リーダー。小暮勝義副隊長と二人で、私たちの宿舎コテージ・オーロラを訪ねてきました。しばし団欒のあと、「それじゃ、元気で頑張りましょう!」と励まし合って別れたのが……今生の別れ。

私たち「ツラギの会P29南西壁登山隊」は九月一四日、垂直に千m上部の西壁氷河末端崩落による爆風で、三隊員死亡。私一人だけが九死の中から一生を与えられた。その九日後(九月二三日)、深沢さんらはダウラギリC4上部でルート工作中、表層雪崩に巻き込まれ、彼を含む三隊員が死亡。さらに一〇月二〇日、小暮副隊長も下降中に滑落死亡された。

私が遭難事故処理でカトマンズに戻り、死亡隊員の遺品持ち帰りで一時日本帰国の許可を得るため、ネパール政府観光省シャルマ登山課長を訪ねました。許

可を得たその時、シャルマ課長が手に持っていた写真の一番上が、深沢さん。「なぜ持っているのか」と聞くと、「これからダウラギリ遭難を発表するからだ」と言われます。ダウラギリで遭難があったことは、ネパールのラジオ放送でシェルパが聴き、隊長の私に知らせてくれました。その一人が深沢さんであったことは、シャルマ課長が持つ写真で初め知ったのです。

私たちツラギの会はP29南西壁を登る目的で集まった同志的山岳会なので、死亡者を出してしまった直後に全員が同意し、登高を止めて事故処理に入りました。しかし群馬県山岳連盟派遣のダウラギリ隊はその後も登高を継続し、登頂。第二次登頂者となった山田昇さんはその後も八〇〇〇m峰を登り続け、日本登山界のエースとも称されましたが、一九八九年マッキンリーで遭難死亡。深沢さんはこの山田さんを引き連れ、指導していました。冬の八ヶ岳行者小屋の外で出会った時、山田さんを私に紹介してくれました。

「東電山ノ会」を超えて活躍した深沢勇二郎さんですが、山岳会の枠にとらわれない度量の深さをもって絶えず支援され続けたのは、「東電山ノ会」先輩の佐々木誉実さんでした。

ここで論点を変え、登山者を俯瞰すると、おおむね次の三タイプに分けることができそうです。

① 登ること、に専念する人(身・技→記録→スポーツ→文明的進化志向)
② 登り、かつ、考える人(心・技・体→人格的統合→文化的+文明的＝複素統合志向)
③ 登るよりも、思考が優る人(思索・創作・評論・編集→文化的価値志向)

日本山岳文化学会創立時において、山岳とするか、登山とするかの相克があったそうです。山岳とすれば前記①～③を網羅でき、山に関わる文化行為を総合的に把握することになります。それゆえ、志向グループに分断される必然も含まれます。さらにデジタル文明時代を迎え、人々は言語的思考空間よりも、直感的感性同調空間への比重が増しました。思考・判断をAIに依存する中で、直観的同調の美学(観光)が増し、論理思考的抵抗の美学(登攀)は薄れます。

創立当初、私は徳久球雄副会長に「文化と文明の違い」を質問しました。しかし、答えは得られません。佐々木さんが『山岳展望　第一二号』に書かれたように、「登るということとは別の価値が必要」となる分野こそが「山岳文化」であり、「登ることだけ」ならば山岳会で構わない。「登り、かつ、考える(心・技・体)、その成果(作品と価値創出)こそが山岳文化の神髄である」ことを、改めて思い返すお別れでした。　合掌

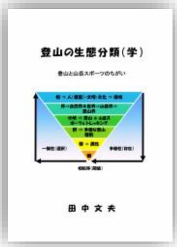
(注：本稿は「会報」掲載原稿を加筆・推敲)

< A5 版、私製印刷製本 >

162P

国立国会図書館蔵書

266P

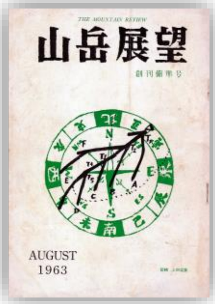


133P

282P

田中文夫（たなか ふみお）
一九四六年神奈川県生まれ。「山岳展望」第二次編集同人。学会元評議員（創立から五期一〇年）。ツラギの会P29南西壁登山隊長。著書『青春のヒマラヤに学ぶ』『頂きのかなたに』『日本文明物語＆哲学（和文・英文対訳合本）』 他私製版多数

< B5 版、冊子印刷製本 >



創刊準備号

第 12 号

第 17 号